ラジオ放送

＜令和3年10月～12月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.437

もくじ ～*contents*

＜小川洋子の「私のひきだし」＞

☞ 作家・小川洋子さんによる心温まるエッセイ

●けーばあちゃん　*page 1*

●壮大な世界の一部として　*page 5*

●死者たちの声　*page 9*

●私の子育て　*page 13*

●自分の弱さを認める力　*page 17*

＜先生＆信者さんのおはなし＞

☞ 金光教の先生や信者さんのお話です。

●お役に立つ会社であれば　*page 21*

●亡き夫の魂と共に　*page 26*

●花の咲かせ方（信心ライブ）　*page 31*

●桃太郎のような元気な赤ちゃん（信心ライブ）　*page 35*

●忘れられない泣き声　*page 39*

●人の幸せのために　*page 43*

●私にできることは　*page 47*

●神様になった子どもたち　*page 52*

《小川洋子の私のひきだし》

「けーばあちゃん」

皆さん、はじめまして。作家の小川洋子です。本日から5回にわたり、「小川洋子の『私のひきだし』」と題しまして、私が金光教からどのような影響を受け、それを支えとしてどのように小説を書いてきたか、お話ししたいと思います。

私は1962年、昭和37年、祖父母が教師を勤める、岡山の金光教岡東教会の離れに生まれ育ちました。大勢の信者さんに囲まれながら、自然と金光教の空気に包まれて大きくなりました。

今日は、当時の雰囲気をお伝えするため、自己紹介代わりに、以前書いたエッセイを一編、ラジオ用に編集して、読んでみたいと思います。タイトルは『けーばあちゃん』です。

その人は本名を三宅さんといい、みんなから「けーばあちゃん」と呼ばれていた。けーばあちゃんは熱心な信者さんの一人だった。

小柄で、いつも髪を丁寧に結い上げ、お琴と歌が上手だった。掃除や台所仕事や私を含めた子どもたちの守りや、とにかく教会のあらゆる用事を引き受け、それらをてきぱきと穏やかにこなしていた。また、そうすることがうれしくて、ありがたくて仕方ない、という感じに見えた。生活の全てを信仰のために尽くしている方だった。

もちろん当時の私は、けーばあちゃんの信仰の深さについて分かっていたわけではなく、ただ優しいおばあさんとして、一緒に遊んでもらおうと、一日中くっついていただけだ。

私の祖母とけーばあちゃんは年齢も近く、教会の人間と信者という間柄を越えて親友同士でもあった。今振り返ってみると、私は祖母とけーばあちゃんを全く区別していなかったように思う。つまり、血のつながったおばあちゃんと、他人という区別をだ。

私はけーばあちゃんに怒られたり、大きな声を出されたり、邪険にされたりしたことは一度もない。たったの一度もない。そこにあったのは完全な優しさだった。私の存在すべてを許してくれる人だった。

そんな愛情を、しかも身内以外の人から注がれたことは、たいそう幸せだったと思う。世の中にどこでも転がっている種類の愛情ではないだろう。私にとって、けーばあちゃん自身が神様であったと言ってもいい。

2歳か3歳の頃、母が盲腸で入院し、けーばあちゃんに預けられたことがあった。私は落ち着きのない目の離せない子どもで、しょっちゅう階段から落ちたり、飴をのどに詰めたりしていたので、母は何か事故が起こりはしないかと心配でたまらなかったらしい。ところが、本当に事故が起こってしまった。教会の前の道で、車にはねられたのだ。

かすかに、ボディの冷たい感触や、空が舞っていた様子を覚えているような気もする。しか

し痛みはなかった。どこもけがをしなかったからだ。車の側面と接触し、そのまま車のスピードに合わせてくるくると回転して、尻餅をついた。ただ目が回っただけだった。

あの時のことを思い出すたび、申し訳ないことをしたと胸が痛む。もし大きな事故になっていたら、どれほどけーばあちゃんを苦しめることになっただろう。

けーばあちゃんは80過ぎまで長生きされたが、結局何のお返しもできなかった。あれほどの優しさに報いるためには、何をすべきだったのか、今でも見当がつかない。

このエッセイを読んだ教会の先生方が幾人も、「うちの教会にも似たような信者さんがいますよ」と、仰いました。それを聞いた時、懐かしいけーばあちゃんの姿が色鮮やかによみがえってきました。そして同時に、私のけーばあちゃんは死んでいないんだな、と思ったのです。肉体は見えなくなったけれど、私の知らないどこかの教会で、今も神様に見守られながら、大事なお務めをされているのだ、けーばあちゃんは生きている。そんな確かな思いを抱きました。

人は死んでからもなお、生きることができる。これは究極の矛盾です。しかし、神様の働きは、人間が理屈でこしらえた、生きていることと、死んでいることの境界線など、やすやすと超えてゆきます。けーばあちゃんは、矛盾を乗り越えた先にある、おおらかな安らぎに私を導いて

くれています。

本日は、私の記憶に残る最も古い金光教の体験についてお話しさせていただきました。久しぶりに自分のエッセイを読み返したことで、大切な人と再会できました。ありがとうございます。

それでは、また来週、よろしくお願いいたします。

《小川洋子の私のひきだし》

「壮大な世界の一部として」

おはようございます。作家の小川洋子です。今日は「小川洋子の『私のひきだし』」第２回です。

前回は、子ども時代に体験した、金光教の思い出を語りましたが、今回は、現在の私が日常生活の中で感じている神様の働きについて知っていただきたいと思い、以前、毎日新聞に書いたエッセイを一つ、放送用に少し編集して朗読したいと思います。

タイトルは「壮大な世界の一部として」です。大げさなタイトルですが、中身は、畑仕事のお話です。

庭の片隅で野菜を作りはじめて1年になる。素人が農薬を使わずにやっていることなので、虫に食べられるのが半分、人間の口に入るのが半分といったありさまだが、それでも十分満足している。

虫と言っても、その姿をはっきり確認できるケースは少なく、彼らの正体が何なのか、実はよく分からない。彼らは賢い。昼間は土の中に隠れ、夜、暗くなってから這(は)い出してせっせと食事をしているらしい。しかも食べ頃をよく心得ている。まだちょっと早いかなあ、今週末くらいが獲り頃かなあと、ぐずぐずしていると、その間に必ず先を越される。結局、決断の遅れを後悔しつつ、穴だらけになった虫たちの食べ残しを頂戴(ちょうだい)することとなる。

朝、キャベツの葉にポツポツとくっついた彼らのフンを見つけると、思わず見入ってしまう。それらはとても小さいのに、きちんと形がそろい、一定の間隔を保っている。朝日が透けるほどに薄い黄緑色の上で、露に濡れた黒い粒が、生まれたての生きもののように光って見える。黄緑と黒の模様は、自分が眠っている間に畑で起こった出来事の秘密を、そっと伝えてくれる。キャベツはただ悠然と大地に根を張り、虫たちは地中で息を潜めている。その静けさを乱さないよう心しながら、私は茎に包丁を当て、キャベツを収穫する。

自分で野菜を作ってみて一番驚いたのは、本来駆除すべき虫たちがさほど憎くないということだった。以前はスーパーで買った野菜にナメクジを1匹見つけただけでギョッとしていたが、今は全く動じない。「上手に隠れてよくこんなところまでやって来たなあ、お前」と、声を掛けてやりたくなるほどだ。むしろ逆に、同じ野菜の恵みを共有する仲間のようにさえ感じる。齧られた跡やフンによって、彼らと交流しているのだ。

畑をやっていると、しゃがんでいる時間が長くなる。考えてみれば、以前はこんなふうに地面に視線を寄せることなどなかった。土で靴や洋服が汚れるのは嫌なことだったはずなのに、気が付けば、土の感触と匂いが大好きになっていた。

農薬が自然環境に与える影響について記した「沈黙の春」で有名な生物学者、レイチェル・

カーソンは、遺作「センス・オブ・ワンダー」の中で、「自然のいちばん繊細な手仕事は、小さなもののなかに見られます」と書いている。さらに、その小さなものを見ようとする時に訪れる、人間サイズの尺度の枠から解き放たれる喜びについても触れている。

自分を小さくすればするほど、無力になればなるほど、偉大な自然の営みに気付かされる。人間の頭脳だけでは決して作り出せない、ホウレン草やチンゲン菜やキャベツの不思議、ナメクジやアリや青虫の賢明さに心打たれる。人間が編み出した道具である言葉の通じない世界にひと時身を置くと、自分が壮大な世界の一部として、その大きさの中に包まれているのだ、と実感できて安堵する。

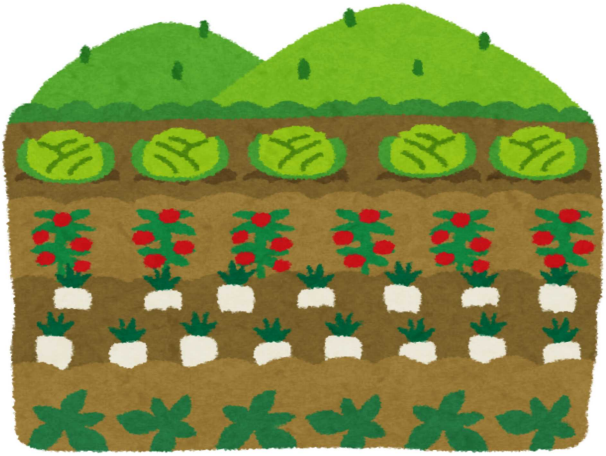
さて、ある朝、畑の様子がどこかおかしい。地面が踏み荒らされ、ちぎれた葉っぱが散らばっている。そして、昨日は確かにそこにあったはずのキャベツが1個、完全に姿を消している。わが家の飼い犬、ラブの仕業だった。虫とキャベツと人間、この共有の和に、彼も参加したかったらしい。もっとも彼の場合、共有ではなく独り占めだけれど。

いかがだったでしょうか。本文中に、「偉大な自然の営み」という言葉が出てきましたが、これをそのまま「神様」に置き換えても何ら不都合はないように思います。自らの未熟さに気付き、打ちひしがれた時こそ、神様の働きをすぐ近くに感じることができる。だとすれば、私

は大いに自分の至らなさを認めてやろう。嘆く必要などないのだ。土をいじりながら、そんなことを考えています。

土には不思議な温かさがあります。こちらが心を開けばいつでもじんわりと掌（てのひら）を包んでくれる、押し付けがましくない温かさです。それこそ神様からの合図だ、という気がします。

本日も、ありがとうございました。また来週、よろしくお願いいたします。



《小川洋子の私のひきだし》

「死者たちの声」

おはようございます。作家の小川洋子です。「小川洋子の『私のひきだし』」と題してお話ししております。今日はその3回目。今回は私が小説を書くことに目覚めた頃のお話をしたいと思います。

私は、ことさら皆様に聞いていただくようなエピソードなど何もない、平凡な子どもでした。両親、庭続きの教会に住む祖父母、伯父伯母、そして信者さんたち、たくさんの大人に見守られながら、弟やいとこたちと、ひたすら走り回って遊んでいました。何の心配もなく、永遠に今の楽しさが続くと信じられる子ども時代でした。

一つ鮮明に覚えているのは、あらゆるものごとに感謝する祖父母の姿です。日常生活のこまごましたことから、自分が今ここに生かされているという究極の事実に至るまで、もうそれは、あらゆること、という以外に表現のしようがありません。何か困難な局面に出遭った時でさえ、それを神様に感謝する力で乗り越えようとしているように見えました。

読書感想文や習字で賞状をもらうと、祖父母はお年玉の袋に小銭を入れて私にくれました。しかしそれは、ご褒美ではありません。袋には鉛筆で、「よろこばせてくれたお礼」と書かれていました。

祖父母のおかげで、私は子どもの頃から、感謝される、という経験を重ねることができました。誰かに感謝されるとは、言い換えれば、私という存在が許される、認められる、尊重される、という経験だったかもしれません。そのため私は、小説を書きたいと思った時から現在まで、自然に自らの思いを貫いてきました。祖父母の絶対的な感謝の念を土台にできたからこそ、安心して、自分で自分の人生を築いてこられたのだと思います。

さて、私にものを書くことの喜びを教えてくれたのは、中学生の頃に出合った「アンネの日記」でした。反ユダヤ主義を掲げ、ユダヤ人の絶滅を目指したナチスドイツの迫害から逃れるため、隠れ家へ潜んだアンネ・フランクがつづった日記です。家族で隠れ家へ潜んだ時、彼女は学校で学んだり、友だちと遊んだり、スポーツを楽しんだり、というあらゆる自由を奪われました。命を守るために、存在そのものを抹消しなければならなかったのです。結局、アンネ・フランクは13歳から2年余りの間、隠れ家での生活を強いられたのち、密告により逮捕され、強制収容所で15年の短い命を終えました。

そんな彼女がつかみ取ったほとんど唯一の自由が、日記を書くことでした。日記帳を開いている間だけは、思う存分、心の内をさらけ出し、閉ざされた世界を飛び出して、果てしのない未来を旅することができました。

「言葉は人を、こんなにも自由にするのか」

私は初めて、言葉で何かを表現することの奥

深さに目覚め、アンネ・フランクの真似をして、自分でもノートに、たどたどしい文章を書きつけるようになりました。その日記ともつぶやきとも詩とも言える文章が、やがて物語となり、現在の作家の仕事につながっていったのです。

「アンネの日記」を通してホロコーストの問題に関心を持った私は、作家になってから2度、ポーランドのアウシュヴィッツ強制収容所を訪れました。そこには、命を奪われた人々の遺品が大事に保管されています。例えば、家族の写真や手紙や記念の宝石など、最後まで手放せない品々を運んできたのだろうトランク。靴。眼鏡。義足。お人形。髪の毛。それらが展示スペースに、文字どおり山のように積み上げられています。

この中に、アンネの靴もあるかもしれない。おしゃれな彼女がいつも丁寧にすいていた髪の毛もあるかもしれない。

そう思った時、私にとって遺品の山は、単なる品物ではなくなりました。潰れた靴一足、もつれた髪の一束、それら一つひとつ全てが、かつて自分と同じこの世界にいた人々の、声なき声、生きた証なのです。

この、言葉にならない死者たちの声を聴き取り、書き記してゆくのが作家の役目だ。その時私は初めて、自分の仕事の意義を悟りました。日記によって自分を表現する自由を教えられ、さらにそこから発展し、無言のまま死んでいった人々の声を物語に置き換えてゆく。まさに私の作家人生は、アンネ・フランクに導かれてい

ると言っていいでしょう。

私が小説を書けるのは、実際には会ったこともない死者たちのおかげです。一つ、作品が完成すると、私は登場人物たちに向かって感謝の念を捧げます。かつて祖父母がやっていたのと同じように、両手を合わせます。すると、「よろこばせてくれたお礼」という祖父母の言葉がよみがえってきて、私を励ましてくれるのです。

それでは、また来週。次回は私の子育ての経験についてお話しできればと思います。

《小川洋子の私のひきだし》

「私の子育て」

おはようございます。作家の小川洋子です。「小川洋子の『私のひきだし』」第４回です。本日は、私の子育ての経験から感じたことをお話ししてみたいと思います。

ヴィクトル・ユゴーの小説「レ・ミゼラブル」の主人公、ジャン・バルジャンは、罪人としての過去を捨て、身元を偽って生きてゆく中、血のつながらない少女、コゼットを引き取り、育てます。その経験が彼を変えてゆきます。いつしか、コゼットを守るためなら、喜んで自分の命を神に捧げよう、という境地に至ります。自分の命よりも大切な何かと出会うことが、彼を救ったのです。

自分の命より大切な何か…。若い頃は、そんな発想は全くありませんでした。いつどんな場合でも、自分が一番大事。自分の問題が何より最優先でした。

ところが、子どもを生み、育ててゆく日々の中で、否応なく、人生に対する向き合い方が変化してゆきました。簡単に言ってしまえば、つまり、自分より子どもの命のほうが大事、という思いを抱くわけですが、ジャン・バルジャンとコゼットのように、気高く麗しい物語とは縁遠いのが現状です。授乳して、おしめを替えて、抱っこして、洗濯をして、掃除して、ご飯を作って、その合間に小説を書く。もう目が回るよ

うな毎日です。とても、しみじみ感慨にふける暇などありません。

子どもの産声を聞いた時、何て哀(かな)しそうな声で泣くのだろうと思いました。これからの人生で出合う様々な哀しみを予感しているかのような、その切ない響きを耳にし、私自身、喜びという単純なひと言では到底表しきれない感情を抱きました。私が手を放せばあっけなく死んでしまうほどに未熟な、この小さな命の塊が、ただひと筋、私を頼りとしてこうして泣いています。引き継がれてゆく生命の原点に触れ、畏怖の念を覚え、頭を垂れてただ祈るしかない、という心持ちでした。

今振り返ってみると、子育てとは言っても、育てた、教育した、という記憶はありません。ただひたすら心配していた、というのが実感です。子どもはすぐ病気にかかります。いくらありふれた病気であっても、母親はいつでも最悪の事態を予測して看病します。中耳炎で泣いている子どもの背中をさすりながら、この菌が脳に達し、意識不明になり、呼吸が止まってしまったらどうしよう、と常識ではありえない事態を繰り返し想像しては、自分で心配の種をどんどん育てていました。

教祖金光大神(こんこうだいじん)様は、「心配する心で信心をせよ」と仰っていますが、私のような者にはとても無理な話です。私にできる精いっぱいは、子どもの体をさすりながら、ただひたすら、「金光様、金光様」とお願いするばかりです。

たとえ成人しても、心配が尽きることはあ

りません。栄養のあるものを食べているか、仕事で行き詰っていないか、ちゃんと眠れているか…。いくらでも心配は湧き出てきます。心配する心で、子どもの無事を祈っています。

自分の命より大事なものと出会うことが子育てだ、とようやく分かったのは、とうに子育てを卒業し、孫まで生まれた今になってからでした。3時間置きにおっぱいをやり、熱のある子の背中をひと晩中さすり、朝5時に起きてお弁当を作っていた、あの必死な日々が、いかに幸せであったか。愛する者のために喜んで命を差し出せる自分になれたことが、いかにありがたかったか。全てが過ぎ去ってから、気付いたのです。

ミュージカル「レ・ミゼラブル」の中でジャン・バルジャンは、神に向かって、「死ぬなら私を死なせて」と歌います。コゼットへの愛によって、人として最も尊い心を得ます。そして、偽りのない本来のジャン・バルジャンに戻り、コゼットに見守られ、ほほ笑みながら天に召されます。

金光教の教典にはこんな教えもあります。

「信心する者は驚いてはならない。これから後、どのような大きな事ができてきても、少しも驚くことはない」

もし明日、自分が死ぬことになったと言われたとしても、驚く必要はありません。息子と孫が庭にしゃがみ込み、二人で一緒に蟻を見つめている様子を窓越しに眺めていると、私はただもうありがたい気持ちでいっぱいになります。

若い者たちのために、静かに命を差し出したとして、どうして嘆き悲しむ必要があるでしょう。

そういう心境にさせてくれたのが、私にとっての子育ての体験です。

来週はいよいよ最終回です。小説を書いている時、作家の中で何が起こっているのか、というようなお話をしたいと思っています。よろしくお願いいたします。

《小川洋子の私のひきだし》

「自分の弱さを認める力」

おはようございます。作家の小川洋子です。「小川洋子の『私のひきだし』」。いよいよ今日が最終回です。最後は、私が小説を書いている時に考えていることなど、お話ししたいと思います。

しばしばインタビューで、「この小説の発想はどこから生まれたのですか」と質問されます。そう聞かれるたび、どう答えていいかよく分からず、言葉に詰まってしまいます。自分が書いたのだから、この小説について最も的確に説明できるのは、他の誰でもない、私であるはずだ。その私がちゃんと答えてあげなければ、相手はどんなにがっかりすることか…と思って、小説の1行目を書き出した時のことを懸命に思い出そうとするのですが、記憶はぼんやりかすんでいます。

あえて言葉にするなら、偶然、としか言いようがありません。ある日、偶然目にした一瞬の風景、誰かが口にしたひと言、手に取った本の1ページ。そういう何かが、勝手に、私の中に飛び込んできます。私のイメージでは、それは小さな石です。ふと気付くと自分はそれを握っている。一見、何の変哲もないただの石のようですが、私はそこに物語が潜んでいるという確信を感じています。死者たちの生きた証が地層のようにそこに刻まれています。その地層に潜

り込み、彼らの足跡を読み解く。それが、小説を書いている時、私の中で起こっていることです。

つまり、小説を書こうと思った時点、小石を握った時点では、作家自身もこれから先、小説がどう動いてゆくのか、分かっていないのです。設計図などありません。結末ももちろん見えていません。ただ、世界の片隅に追いやられ、誰にも届かない小さな声で語られる死者たちの物語を、どうにかして受け止めようとする強い思いだけが、私を支えています。

例えば、「博士の愛した数式」という小説を書き始めた時、私に分かっていたのは、記憶障害を持つ数学者と、家政婦さんとその息子が、数学の美しさを共有する、という漠然とした像だけでした。そこに江夏豊の背番号28や、完全数や、友愛数や、ルート記号が出てきて、物語を大きく動かすことになろうとは、予想もしない事態でした。

この一行を書いたら、ようやく次の一行が見えてくる、という心もとない歩みですから、小説を書いている間中、ずっと不安です。先の見えない薄暗がりの中を、一歩ずつ、手さぐりで進んでゆくような状態です。でも、孤独ではありません。私に描かれるのを待っている、登場人物たちがいます。もし私が放り出してしまったら、彼らの声は行き場を失ってしまいます。そして長い旅の果てに、いつの間にか、最後の一行にたどり着いているのです。

小説を書き終わった時、本当にこれを書いた

のは自分なのだろうか、という不思議な感覚に襲われます。偶然の力、登場人物たちの助け、そういう自分以外の何ものかの働きがなければ、とてもここまではたどり着けなかった、という感慨です。

その「何ものか」を「神様」と仮定しても、矛盾はありません。神様は先回りをして、小説の行くべき道を示し、私を引っ張ってくれるわけではありません。私の隣にいるのです。私と同じ場所にいて、私と同じように不安を抱え、迷っています。けれど、決して私を見捨てません。その絶対的な安心があるからこそ、小説を最後まで書き通すことができるのです。

臨床心理学者の河合隼雄さんは、「ココロの止まり木」という本の中で、例えば文化財の布を修復する場合、補修する布は、元の布より「少し弱い」のがいい、補修する側が強すぎると、結局、布が駄目になる、という意味のことを書いておられます。先に立って、ぐいぐい引っ張ってくれるような存在よりも、むしろ黙ってそばに寄り添ってくれる、よりか弱いもののほうが、救いになる…。まさに、小説を書いている時私が感じる神様は、そのような存在です。

そして、自分もまた、登場人物たちに対して、か弱いものでなければならない、と気付かされます。強引に彼らを引っ張り回すのではなく、彼らが行こうとしている場所まで、辛抱強く、付き添ってゆく。それが作家の仕事です。

ありのままの自分の弱さを認める力。作家にとって最も必要なものは何か、と聞かれたら、

私はそう答えるでしょう。神様の働きに助けられ、小説を書き続けてきた私が、見付けた答えです。

5回にわたりお聴きいただきました。私のつたない話の中から、ほんのひと言でも、どなたかの胸に響く言葉があったらと願うばかりです。どうもありがとうございました。

《信者さんのおはなし》

「お役に立つ会社であれば」

（ナレーション）

兵庫県北部にある豊岡（とよおか）市は、日本一のかばんの産地として知られている街です。昨年から始まったコロナウイルスの広がりは、この街の産業にも大きな打撃を与えました。かばん作りの会社を営む57歳の服部清隆（はっとりきよたか）さんからお話を聞きました。

（服部）

テレワークが始まり、通勤する方も少なくなり、だからビジネスバッグも減り、旅行も自粛。特に海外旅行なんかは、もうほぼほぼ何もない状況で、トラベルバッグの受注もほとんどない状況でした。去年の4月ぐらいからは、本当に厳しい状況がずっと続いてましたけれども、じっとしてても仕方ない。その時に、やはり何か私たちの技術をもってお役に立てることはないだろうかと考えて、「フェイスシールドを作ろう。フェイスシールドだったら、例えばかばんに使うクッション材であったり、名刺入れなどに使うシートも使える。これだったら作れるんじゃないか」ということになりました。

そうしているうちに、兵庫県の医療機関から、公立病院でフェイスシールドが全然足りないということで、「とにかく服部さん、間に合わせてほしい」と注文を頂くことができました。また、私たちもできることがあるんだということ

を気付かせていただきました。

その後、「実は防護ガウンも足りないんだ」と。「かばんを切る裁断機でビニールを切れないかな」というお話を頂きました。ただし、お話を聞くと、大量の数量が必要で、当社だけではどうにもならず、同じように困っている同業者に声をかけさせていただいたところ、快く引き受けてくれる所がありました。

初めてのことでしたけれども、20日後には、何とか1万枚作ることができました。その後、一日5千枚ずつぐらいですけれども作ることができて、何とか病院の状況を少し脱するのにお手伝いできたかなと思ってます。

（ナレーション）

フェイスシールドや防護ガウンの他にも、抗ウイルス加工のスプレーケース、マスクケース、衣装カバーなど、様々な衛生用品を手がけていきましたが、服部さんにとって、これは大変勇気の要ることでした。

服部さんは、幼い頃から家族と共に金光教の教会にお参りしています。信心の篤い父親から、「何事も神様にお願いしながらさせていただきなさい」と、いつも教えられてきました。

（服部）

今までしたことがないことばかりでしたので、心の中はすごく不安で不安で仕方なかった時に、新しいものができるたびに、教会にお参

りしました。「こういうものを作らせていただきたい」と先生にご相談に行くと、先生は、「きっと神様が後ろに付いてくださっています。そのようにお願いしましょう」と言ってくださいました。私もそう思うことで、何か不安な気持ちがある時には、「いつも神様が後ろについてくださってるから迷うことなく前に行こう」と後押しをしていただいているように感じました。当然モノづくりですから、すぐに結果が出ることはあまりないんですけど、それでもいつも、「神様は後ろにいらっしゃる。だから僕は、作った物で世の中のお役に立つというか、持っていただく人、買っていただく方に満足していただく商品を必ず作っていかないといけない」と思ってやっています。

（ナレーション）

金光教では「一生死なない親に巡り会ったと思って、何事でも無理と思わないで神にすがればよい」と教えられています。服部さんも、教会の先生から、そのような話を聞いたことがありました。

（服部）

結婚して初めて子どもを授かった時に、先代の先生が「どうや」と尋ねてくださいました。私は、「どんな子でもええから、とにかく元気で生まれてきてほしい」と申しましたら、先生が、「こんな時は精いっぱい神さんにぜいたくなお願いをしよう。もうとにかく世界一素敵な子が生まれてきますようにぐらいのお願いをし

ましょう」と言ってくださいました。あの時のことを思い出します。

結婚して5、6年のことでした。「ちょっと子どももできんかも分からんなあ」なんて諦め気味だったこともありまして、あの時の言葉は非常にうれしくて…すみません、ちょっと先代先生のことを思い出したら涙が…。もうとにかく何でもいいから健康に生まれてきてくれたらいいというような、それが謙虚なことなのかなと思ってたんだけど、「たまには神さんにわがままなお願いをしてみなさいよ」と言っていただいて、すごくうれしかったし、神様を身近に感じたし…。

（ナレーション）

教会の先生の優しさと重なって、神様のお心が胸に染み、この時の感動は、今も服部さんを励ます力となっています。

（服部）

商売の中でやっぱり厳しい時もあったんだけれども、お役に立たせていただいてる会社が見放されるわけがないと。もう信じるしかない。そういう会社は、神様も世の中もきっと見放さない。だから、そういう会社であり続けることを、ずっと社員みんなにも伝えていかないといけない。社員一丸となってみんなで同じように考えていかないといけないと思いますね。

コロナになったこの今だからこそ、より一層

神様が身近に感じるようになったという気がいたします。

（ナレーション）

時代の荒波に揉まれながらも、服部さんは、お役に立ちたいという揺るがぬ願いで、会社の経営を進めています。

《信者さんのおはなし》

「亡き夫の魂と共に」

（ナレーション）

今日は、43歳で亡くなった磯谷剛史さんの妻・名帆子さんのお話です。金光教大崎教会の長女として生まれた名帆子さんは、勤めた会社で同い年の剛史さんと出会い、結婚しました。

（磯谷）

私のほうが彼と結婚したいと強く思ったんです。声を掛けてきたのは向こうですけど、そこから会うようになって、踏切を二人で歩いてベビーカーを押しているという映像がパッと浮かんだんです。「私、この人と結婚する」と確信的に思いました。そして、本当に思い合って結婚することができたんです。うれしかったですし、10年経っても周りに冷やかされるほど、お互い好き好きとなっていました。

（ナレーション）

剛史さんはお寺の檀家の家庭に育ちましたが、チャリティーバザーや近所の清掃ボランティアなど、名帆子さんの実家の教会行事にも積極的に参加されました。そして、そこで出会った人たちとの関わりをとおして、人を祈り、人を愛し、人を大切にしていく金光教の信心に共感するようになっていきました。やがて、夫婦の間に2人の女の子が生まれました。優しいパパで、仕事もできた剛史さんに悪性の胃がんが

見付かったのは今から約４年前。手術で一時は回復するも、再発が分かった時には既に手遅れでした。

（磯谷）

青天の霹靂（へきれき）でしたね。とても体調も良くて、調子が良いのでこれからという時に。人間ドックを毎年受けていたのですが、その年、最初は問題ないと帰されたのに、見落としされてたのか、別の日に、「ちょっと気になる影があるから、紹介状書きましょうか？」という感じで電話がかかってきました。それくらいならと思って彼は行ったら、そこで印環（いんかん）細胞胃がんですと言われました。いわゆるスキルス胃がんと同じくらい悪性度が高く、発見されづらくて、見付けられた時にはステージが進んでいるタイプでした。やっかいな、顔つきの悪いがんと言われているタイプで、ステージは既に3まで行っていたんです。

（ナレーション）

あんなに元気で、仕事もバリバリでき、家庭では家族を大切にしてくれた剛史さんが、食べることも、排泄（はいせつ）することもできにくくなっていきました。体が衰弱していくなかで、剛史さんは日々神様に手を合わせ、祈りを捧げました。

（磯谷）

病気になってから彼は、毎朝必ず外の空気を吸いにいって、戻ってきてご祈念をするんです

けど、自分は体がつらい状態なのに、祈ってることは自分のことじゃないんですよ。「病気が治りますように」とか「助かりますように」じゃなくて、私がＰＴＡで大変な目に遭っているとか、子供が学校で悩みがあるとか。私の父も、その頃入院したり、大変な時だったんですけど、そんなことを祈ってるんですよね。人のことを祈る。それで、「自分のことは誰かが祈ってくれている。だから自分は誰かを祈って、その誰かも誰かを祈って。そうやって祈っていけば、世界って平和だよね」と言うんです。すごいこと言えるなって思いました。人となりって究極の時に出ると思うんですよね。ああいうつらい状態で、そういう言葉が出てくる。本物だなって思うし、改めてすごい人と出会えたなと思います。

（ナレーション）

その後、２回目の手術をしましたが、術後の経過は思わしくなく、腸閉塞を起こし、腹水もたまり、医師からは余命幾ばくも無いと告げられます。それでも剛史さんはうろたえることもなく、名帆子さんに、「大事な話があるけど、いいかな？」と言葉を伝えました。

（磯谷）

「今、生きている。今、こうしていられてる。そこを感謝する。十分じゃないかな。どれだけ生きたかじゃなくて、どう生きたか。それが大事なんじゃないかな」ということを伝えてきた

んですよね。金光教というものに出合えた。私と出会えたということを感謝してくれた。妻として、夫の健康を守れなかったということは、自分の中で責苦になっているけれど、彼は決してそういうことは言わなかった。逆に私がそういうのを気にしないように、「ママが妻じゃなかったら、俺はとっくに死んでるよ。逆にママのおかげでここまで生きられた」って言ってくれたんですよ。自分も何かあった時に、究極の時に、そういうふうに心のきれいな人間でありたいなと思いますね。

（ナレーション）

令和元年8月4日、当時10歳の長女・美帆（みほ）さんは、岡山県の金光教本部で行われる、子どもたちの成長を願う年に一度のお祭りの中で、祭壇に折り鶴をお供えするという大役を任されていました。

（磯谷）

うちは朝出かける時に、必ずキスしてハグするのが習慣なんです。美帆が岡山に向かう時に、「いってきます」「気をつけてな」ってハグしてキスして、「じゃあ」って別れたのが、結局最後なんですよね。それができたっていうのが…。しかも、彼が亡くなった時間がおそらく美帆が折り鶴を壇上に…その時間だったんですよね。見てたのかな。見に行ったのかなって。

（ナレーション）

剛史さんは最期に、こんな言葉を遺しました。

「助かるとか、おかげを受けるとか、それってその人その人によって違うと思う。俺にとってどういう意味かなと考えると、ママが笑顔になること。美帆、さっちんが笑顔でいること。それを思うと、俺おかげを受けてるなあ」

剛史さんは、今もきっと名帆子さん、美帆ちゃん、彩月（さつき）ちゃんに寄り添って、見守ってくれているに違いありません。

《信心ライブ》

「花の咲かせ方」

おはようございます。今日は、金光教関教会の松澤光明さんが平成30年5月、滋賀県・金光教大津教会でお話しされたものをお聞きいただきます。松澤さんは、このお話をする半月ほど前に、全く声が出なくなるという経験をされました。

声が出ない。出にくいという経験はありましたけれども、全く出ないという経験はおそらく初めてだったように思います。人間は考えて声を出しているわけではないですね。出る。まさに「出る」ですね。大声を出すという場合は、「出す」ですけどね。声は普段話す時は、出るという感じですわ。出る。「こういうふうに口を開けて、こう言うたら、『あ』という音が出る」なんて考えては言うておらんですね。当たり前にしゃべっておるんであります。

したがって、出るのが全く当たり前。けれども、出ないんですね、それが。自分でもちょっと信じられない。野球で空振りというのがあります。空振りも空振りですわ。多少出てもいいと思うんですけれども、「はっ」と空気だけが肺からのどを通って外へ出て行くんです。音にならない。普通は声帯に引っかかるんでしょうね。その引っかかりがない。

明くる日の朝、布団の中でですね、これは出るやろと思ってですね、「はっ」と言ってみる

んですけれども、やっぱり空振りでございますね。

松澤さんは3、4日全く声の出ない日を過ごされます。病院で受診すると、自然に回復するのを待つということになり、その一週間後にようやく声が出るようになりました。

その声の出ない間、松澤さんは普段と変わらぬ神様への奉仕を続けました。この出るはずの声が当然には出ないという出来事をとおして実感したのは、自分が何かをするためには、それが当たり前にできるよう、前もって支えられていたんだということでした。私たちは自分自身が「生きる」のと同時に、支えられることで生きている。つまり「生かされているんだ」ということへの気付きとなったそうです。そこには、心がじんわり温かくなるような安心感があることでしょう。

さらにお話は続きます。桜がテーマとなりました。

毎年桜を見るたびに、桜の花はすごいなあと思います。幹が隠れるほどに、枝の元から先っちょの先の先まで花をつけますね。普段は山に桜の木なんてあっても分からないんですけども、桜が咲く頃は、「あれは桜の木やったんやな」と、遠目にも「あそこにある」と分かります。皆さんもご経験のことだと思います。

あんな花はそうそう無いんじゃないかというふうに思うのですね。自分を隠すぐらいに花を

咲かす。身いっぱいに花を咲かす。

そう考えた時に、「桜の木ってすごいなあ」と思う。と同時に、「これは桜の花の力なのか」と思うのです。もちろん桜の花の力もありましょうね。あるいは頂いておる質（たち）というんですかね。性（しょう）というのがあるんやろうと思います。

しかし、天地のお恵みがあの花を咲かすんだということを同時に思うのです。そのような頃になったら咲くというのは、光や熱や暖かさ、あるいは寒いうちに蓄えているものもあるんでしょう。そういう天地のお働き、恵みが桜に花をつけて、花を咲かせる。

もっと言いますと、天地が桜の形をとって咲いていると言うてもいいぐらいに思うわけであります。決して桜の花が自分だけの力で咲いているというのではないんですね。そのことを思うのであります。

そうしてみると、私たち人間は天地の親神様の氏子であると言ってくださっている。いとし子であると、かわいらしい子であると言うてくださるわけでありますね。だから、私たちほど、天地のその働き、恵みを受けることができるものも他にないのではないかとも思うのです。

桜の花が、あのように花を付けるように、私どもも命いっぱい輝くことができる。そういうものであろうと思うんですね。生かされて生きるというのは、そういう生き方ができるということではないかと思わせてもらうのであります。積極的に天地の親神様のお力、お働き、お恵みを頂いていこうとする生き方というのが、

「生かされて生きる」という生き方ではないかと思います。

ただひたすらに天地の恵みを受けて「生かされている」桜でさえあれほどの花を咲かせることができる。「生かされて生きる」私たちは、より一層立派に花が咲かせられるはずというお話です。

苦しい時、つらい時、逆境に立ち向かう時、頑張りを強いられている時。そんな心がこわばってしまうような時に、ふと、「自分は孤独ではない。こんな時にも支えられているんだ。天地の恵みを受けているんだ」と思えたら、どれほど心強いでしょう。このような安心の下に生きることが、生かされて生きるということなのでしょう。そんな生き方が、あなたの身にも花を咲かせていくんだよと、桜はそう励ましてくれているようにも感じます。

《信心ライブ》

「桃太郎のような元気な赤ちゃん」

おはようございます。今日は、熊本県・金光教苓北教会にお参りする辻本きくさんが、令和元年12月、金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。辻本さんは東京の大学に進み、そこでご主人と出会います。

夫との出会いは、大学時代に所属していた部活動です。勉強家で素直な性格の夫に引かれ、私が大学を卒業して社会人2年目の2016年に結婚のおかげを頂きました。新しい町に引っ越し、私たちはとても充実した日々を送っていました。

結婚してからしばらくが経ち、私は何となく子どものいる将来を考えるようになりました。その頃は、子どもはそのうち授かるだろうと考えていました。しかし、その頃から体調不良が続くようになり、2017年の春に病院で検査を受けることにしました。

検査の結果はショッキングなもので、「このままでは自然に妊娠するのは難しい」と言われました。治療をするよう勧められましたが、あまりに急な展開に私はショックで言葉も出ず、「また考えてから来ます」と言って、逃げるように病院を後にしました。

家に帰って夫に話すと、「治療したい時に治療したらいいよ。治療したくなかったら2人でいよう」と言ってくれました。その言葉に慰め

られて、私は時節を待とうと思いました。それと同時に、神様は私に何か気付いてほしいことがあるのだとも思い始めました。

しかし、時間が経つと、私の心の中に焦りや不安な気持ちが広がり始めます。今までは何も思わなかったのに、町で小さな子ども連れの家族を見ると、自分の悩みを思い出すようになりました。しまいには、身近な人のおめでたい報告にも喜べない程、自分の心が小さくなってしまっていました。そんな私を、夫は励ますわけでもなく、叱り付けるわけでもなく、ただ黙って見守ってくれていました。

一日一日神様にお願いし、少し前を向いては後戻りするのを繰り返していました。どうにかしてこの状況を改善したいと思っていたところに、子育て中の先輩から、「赤ちゃんを見にこないか」と誘われたのです。正直、全く気が進みませんでしたが、神様が会わせてくださると思って、思いきって行ってみました。それが大正解でした。赤ちゃんを前にすると、そのかわいさに、私が今悩んでいることがどうでもいいことのように思えてきました。

その時からです。「いつか私にもこんな生活が来るから、その時を楽しみにしないといけない。まずは今の生活を大切にしないといけない」と思うようになりました。

辻本さんが、先輩の赤ちゃんを見にいった同じ頃です。教会の先生が、ある人のお話を紹介してくれました。それは、自分の体に「ありが

とう」と感謝の言葉をかけ続けて、病気が快復された方のお話でした。

自分を支えてくれている体に感謝し、感謝の言葉をかけ続けたことで、体の持つ無限の可能性を開花させていったという話を聞いて、私はだんだんと元気が出てきました。「自分の体に本気で感謝しよう。私も同じような実践がしたい」と思い、いつもはボーッとしていた通勤時間を、「ありがとう」と唱える時間に変えてみました。すると、少しずつ心のモヤモヤが晴れていき、自分の表情が明るく変わっていることに気が付きました。最初は形だけで唱えていたのが、だんだんと自分の気持ちになってきました。

２０１８年の４月中旬、交差点で信号待ちをしていた時のことです。半分に割れた桃から赤ちゃんが飛び出しているイラストが大きく描かれたトラックが、目の前を通り過ぎていきました。それを見た時に、神様から「あなたの願いは忘れていないよ」と言ってもらえた気がして、うれしくてありがたくて涙が出てきました。

さらにその２週間後のことです。知り合いから連絡と一緒に写真が何枚か届きました。その中の１枚に、２週間前に見た桃太郎そっくりの置物の写真がありました。それを見た時に、「これはやっぱり神様のお知らせなのか」と思うと、その日は緊張して眠りに就けませんでした。

そしてその後、神様がついに私の願いをかなえてくださいました。願ってやまなかった子宝

を授かったのです。それを知った時、私はうれしくてありがたくて、神様にお礼を言いながら涙があふれ出てきました。

この経験を頂くまで私は、子宝を授かるということを簡単に考えていました。そしてなかなか願いがかなわず、自分の願いにがんじがらめになってしまっていたのですが、その中で同じ悩みを抱える人の痛みについても知ることができました。そうして、今を大切に体に感謝して生きることの大切さを、少しずつ学んでいきました。

２０１８年の12月13日、無事に出産のおかげを頂きました。桃太郎の知らせどおり、元気な男の赤ちゃんでした。

いかがでしたか。

辻本さんは、自分が苦しい時、気持ちを神様に向けたことで、心の向きが良いほうへ変わっていきました。そして、体に感謝することで、心も晴れやかになりました。

私たちは、悩みがあると、どうしてもそれにとらわれがちになりますが、神様に一心におすがりすることで、神様が導いてくださいます。気付きを得たり、心を良いほうに切り替えてくださいます。

皆さんもつらい時、困った時、神様にお願いしてみてはいかがでしょうか。

《信者さんのおはなし》

「忘れられない泣き声」

福岡県、金光教渡瀬教会にお参りしている大園真由美さんは、現在57歳。高齢者施設で看護師として働いています。真由美さんは、子どもの頃から母親に連れられて教会へのお参りを続け、成人して結婚。第1子を妊娠しました。

出産予定日を過ぎても生まれる気配はなく、処置を施しても微弱陣痛で、大変時間がかかりました。ようやく出産となり分娩室に入ると、にわかに慌ただしくなり、医師がスタッフを指示する大きな声が響きます。赤ちゃんの心拍数が落ち、急きょ分娩台で帝王切開手術を行うことになったのです。

「麻酔が間に合わないかもしれない」という声が聞こえ、「麻酔なしで、このままお腹を切られるのか」と、とても怖かったのですが、どうすることもできません。しかし目が覚め、気付いた時には手術は終わっていました。「子どもはどうなったのか。子どもに会いたい」と思う真由美さんでしたが、まだ面会することはできず、医師から説明を受けることになりました。

子どもは十分な酸素と血液が供給されない、重症仮死で生まれ、脳の90パーセントと肺もダメージを受けていて、うまく呼吸ができない状況だというのです。目の前が真っ白になり、その後の話は全く耳に入ってきませんでした。

2、3日後、ようやく子どもに会うことができました。保育器の中でたくさんの医療器具に

つながれた女の子が眠っていました。真由美さんは、「本当にこれは現実なのか」。正直、そのような思いでした。不憫(ふびん)でならず、涙が出て、「こんな大変な目に遭わせてごめん」と、ひたすら謝るばかりで、自分を責める気持ちを拭えませんでした。

真由美さんの入院は2週間続きました。その間、真由美さんのお母さんは、教会へお参りし、教えてもらったことを書き留め、病室の真由美さんに届けました。そこには、「今日もこうして生かされていることに感謝しましょう。決して一人ではない」と書かれていました。「決して私は一人ではない。保育器の中の娘も一人ではない。教会の先生をはじめ、皆が祈ってくれている。祈りの中にあるのだ」と真由美さんは感じ入ったのでした。

「太陽のように皆を明るく」という願いを込めて、太陽の陽の字が入った「陽奈(はるな)」という名前に決まりました。真由美さんの退院後も、陽奈ちゃんの入院生活は続きました。真由美さんは、毎日陽奈ちゃんに会いに行きます。教会にもお参りし、陽奈ちゃんの様子を話し、体のことをお願いしました。

教会の先生は、親としてのつらい気持ちを受け止めてくれて、続いて、「つらいだろうが、ただかわいそうという思いではなく、今こうして生かされていることを神様にお礼申し上げましょう」とお話しされました。真由美さんのお母さんも、いつも口癖のように、「何事も生かされておればこそ」と言います。「どんなささ

いなことでも喜ばないけん。当たり前にできることなんて何一つない。陽奈ちゃんのおしっこが少しでも出た、それだけでもありがたいことよ」と励ましてくれます。

教会の先生やお母さんとの話をとおして、ありがたさを見出すことを繰り返し教わりました。自分を責めるのではなく、小さなことでも大きく喜んでいくことが大事だという思いを強くしました。そして、このようなことを教えてくれる教会へのお参りを、どんなに忙しくても大変な時でも、大切にせねばならないと気付かされたのでした。

陽奈ちゃんがもうすぐ1歳を迎えるという頃、ようやく退院となりました。しかしその後も入退院を繰り返す日々が続きました。

そんなある日、真由美さんは初めて陽奈ちゃんが泣く、その声を聞きました。今まで真由美さんは、陽奈ちゃんの声を聞いたことがなかったのです。健康な子どもと同じ、大きな泣き声が響きました。

「うれしかったです。たぶん、とてもきつかったんだろうと思います。苦しむ陽奈には悪いけれど、うれしかった。初めて声が聞けた。こんなうれしいことはなかったです」

真由美さんは、声が出るということも決して当たり前のことではない。声を発して気持ちを表現できることのありがたさを感じたのでした。

陽奈ちゃんは、7歳の誕生日を迎えた2日後、息を引き取りました。真由美さんが陽奈ちゃん

の声を聞いたのは、あの時とさらに別の日、同じようにきつかったのでしょうか、泣き声を発した、その2回だけでした。

その後、真由美さんは次女と長男の2人の子どもを授かりました。多感な時期を迎え、問題にぶつかることもありますが、「全てが、いのちを頂いて、生かされておればこそのこと」。受け止め方を変えていくことの大事さを子どもたちに話します。忙しい中でも、教会にお参りしてほしい、教会の先生のお話を聞いてほしいと願っています。仕事のことも、高齢者施設の看護師という、神様から頂いた大切な仕事にあたらせて頂いている。少しでも皆さんが喜んでくださるようにと心がけています。

毎日、陽奈ちゃんのことを思い出しながら、息ができること、自分の足で歩けること、食事をおいしく頂けること、ゆっくり眠れること、そして、声を出して気持ちを表せること、どれ一つも当たり前のことではない。何が起こっても、生かされていることへのありがたさを忘れないように、いつでも家族みんなで喜びを見出していけますようにと、真由美さんは願っています。

《信者さんのおはなし》

「人の幸せのために」

（ナレーション）

佐藤功さんは現在78歳。大会社で重役を務め、退職後は金光教と深い関わりのある、兵庫県の関西福祉大学の副学長に就任しました。

佐藤さんは幼い頃、おばあさんに連れられて、大阪にある金光教玉水教会にお参りしていました。ある日、信者さん同士で集まる会がありました。そこでこんなことがあったそうです。

（佐藤）

僕はあんまりそこに行くのは嫌やったんです。だけども、行ったら、お菓子くれはるんですよ。それが楽しみでね。いつも嫌々やけど、おふくろに付いていってたんですよ。

そしたらある時、大きなリンゴを頂いたんです。そこにいた皆さんは、リンゴをその場で切って食べていたんですけれども、僕は食べないで置いてたんです。私は6人兄弟で、僕の下にあと5人兄弟がいましてね。いつでもお菓子でも何でも取り合いですよね。だから、こんな大きなリンゴをもらっても、一人ではよう食べんのね。持って帰って皆に分けてあげようと思ったんね。すると、委員長の奥さんが、「ぼく、なぜ食べないの？」と言うから、「家帰ったら、兄弟待ってるんで、持って帰ります」と言いました。委員長さんは、「1つだったら足らんやろ」と、リンゴをもう1つくれたんです。そう

したら、その横に座ってたお兄ちゃんが、「あんた、ええ目したな。あんた、手ぶらで来て、お参りしたら、大きなリンゴ1つもらった。それだけやなしに、兄弟のことを願ったら、リンゴが2つになった。忘れたらあかんで。これがおかげやねん。信心しとったらこういうおかげがあるねん。よう覚えときや」と、その仲買人のお兄さんが教えてくれた。それで、その時に、「あっ、人のことを願ったら、神様はおかげをくれるんやな」と思った。

それからずっと考えが発展していくんですよね。だから、今でも、「自分のために一心になったってあかん。一心になるのは人のために、人を助けるために一心にならなあかん」と思っています。

（ナレーション）

そう語る佐藤さん。いつも人の幸せを願うことを大切にしています。

以前の会社でアメリカに行き、ニューヨークで勤務していた時のことです。佐藤さんは、そこで金光教トロント教会の岸井先生と出会います。海外での生活の不安や心配事を相談したり、お祈りしてもらったりしていました。

おかげで、海外での生活にも慣れ、順風満帆な毎日を送っていたのですが、そんな中で佐藤さんは髄膜腫（ずいまくしゅ）という脳の病気にかかります。一度は取り除けたのですが、1年後に再発してしまいました。当然そのことは岸井先生に相談していました。

（佐藤）

これだけご祈念していただいて、自分でも一生懸命やったのに、なぜまた再発するのか。神様は何を考えてるんやろうなと思った。

それで、岸井先生に、「先生、あと5年だけ命を接いでもらうようにご祈念していただけませんか？　5年経ったら、下の子どもが大学を卒業する。大学を卒業するまではやっぱり親の責任やと思ってるから、いろんなことをしてあげれると思ってね」と言うと、えらい怒られてね。「佐藤さん、命をそんなふうに考えてはいけません」と、えらい怒られました。あの時はびっくりしました。岸井先生は優しいんやけど、その時だけは、「命を何と心得てるんですか。命は神様のものやから、どんなことがあっても文句は言ったらいけません。その神様にこうせえ、ああせえというお願いなんて私はできません」と怒られた。それで、「ああ、申し訳ございません」と謝った。「どうぞ命を取り次いでもろうて、良うなったら御用にお使いくださいますようにお願いしてください」と言うと、「分かった。それやったらご祈念してあげる」と言ってくれて、ご祈念してもらった。

それで、2回目を手術して、今日も元気にやらせてもらってるんやけど、そんなことがありました。

（ナレーション）

佐藤さんはこの出来事をとおして、神様に生かされている自分だということに気付きまし

た。そして、これからは頂いた命を大切にして、社会のお役に立たせていただきたいと願い直すのです。

定年退職後、その思いは一層強まり、自分の経験した話を積極的に人に伝えたり、教会で発行されている新聞を配る時には、その人の幸せをお祈りしながら配ったりしています。

そして4年前、佐藤さんのこれまでの実績や、いつでも人のお役に立つことを第一に考える人柄を知った、関西福祉大学の理事長から、副学長になってほしいと声が掛かりました。佐藤さんは「このために体を治してもらったのだ」とありがたく思い、引き受けました。

「人の幸せを願うと、自分の事は神様が何とかしてくれる」と、佐藤さんは自信をもって話します。その言葉のとおり、副学長として、「大学がより良いものとなりますように」と願い、教職員一人一人に寄り添います。学生たちには、「大学を卒業した後も幸せに生きることができるように、勉学だけでなく、人としての生き方を学んでほしい」と願いを掛けています。

佐藤さんは今日も、誰かのお役に立ちたいと、頂いた命をイキイキと輝かせ、大学へと足を運びます。

《信者さんのおはなし》

「私にできることは」

（ナレーション）

神奈川県は三浦半島の葉山で暮らす高井瑠美（たかいるみ）さん42歳。高井さんは、代々金光教を信心する家に生まれ育ちました。

現在ボランティアで「グリーフケア」に取り組んでいます。グリーフケアとは、大切な人を亡くした悲しみ・苦しみといった悲嘆を抱えた方に寄り添い、立ち直ることができるようにサポートすることです。

そのきっかけとなったのが、7年前の健康診断で高井さんに子宮頸（しきゅうけい）がんが見つかったことでした。その時、高井さんは教会の先生から、「がんを、願いの『願（がん）』と受け止めて、神様の願いが何なのか見つけていこう」と諭されました。幸いにも初期のがんで、一部を切除しただけで良くなったのですが、ちょうど同じ頃、親友のアコさんにも同じ子宮頸がんが見つかりました。

（高井）

彼女はステージ2のBでしたので、結構深刻だったんです。いろいろ相談されるんですけど、私は全く彼女の気持ちを理解できなかった。頭では分かるんですけど、自分がそこを通ってないので、寄り添えなくて…。

（ナレーション）

それでも、髙井さんは、少しでも力になりたいと思い、アコさんの話を一生懸命聞いて、自分が信心によって助けられた話をしました。また、参考になればと思って、九死に一生を得て助かった金光教の先生が書いた本を渡したのでした。ところが…。

（髙井）

後日お母様から「こういう本は困ります」って言われたんですね。「この方は、こういうふうに受け止めることができたからいいけれども、そういうふうに受け止められない娘のような子に、こういうのを見せられると余計に落ち込んじゃうんです」。

お母様はすごく優しい方で、一緒にホームパーティーとかよくやってくださって、本当に仲良くしていたのに、そうやってパシンと言われたのが、自分の中で頬をたたかれたような、目が覚めたような感じがしました。

（ナレーション）

髙井さんは、これまでを振り返り、苦しんでいるアコさんを元気付けたいと思ってしてきたことが、実は自分が正しいと思う信心の押し付けだったのではと反省します。

自分の欠点を自覚し、信心を前面に出して向かうのでなく、どこまでも相手の心に寄り添って接することが大切だと気付かされたのでした。

その後知り合いの看護師に、病気の人との接し方について相談すると、グリーフケアのことを教えられ、近々講座が開かれるということでした。アコさんに何とか元気になってもらいたいと思っていた髙井さんは、早速勉強を始めます。

しかし1年半が過ぎた頃、突然アコさんの危篤の知らせを受けます。すぐ病院に駆け付けたのですが、それがアコさんとの最後となってしまいました。

（髙井）

本当にショックだったんです。彼女のお国替えというのは、すごくショックだったんです。それでもずっと続けてきたグリーフケアの勉強も、これでやめてしまったら、どこか彼女の役に立てなかったという罪悪感みたいなものもありました。だから、そのままずっと勉強は続けました。

（ナレーション）

アコさんが亡くなってしばらく経ったある日、友人とアコさんの自宅に行くことになりました。その前日、教会にお参りして先生にそのことを伝えると、先生はご神前にお供えしていた白ワインを下げられ、「持って行ってあげなさい」と言ってくれました。そのワインのラベルには、ワインとしては珍しく漢字で「喜び」という文字が印字されていました。

（高井）

私がお手洗いに行こうとしたら、キッチンでお母様が泣いてたんです。何て声をかけようと悩んだんだけど、「今日持ってきたワインね、実は昨日教会に行った時にご神前にお供えになっていたものなんです。アコちゃんは白ワインが好きだったし、ラベルに『喜』って書いてあったから、何かアコちゃんが喜んでくれてるんじゃないかなって私感じて。これ、たぶんアコちゃんのメッセージじゃないかな」っていう話をお母様にしたんです。そうしたら、お母様がすっごい感動されて、私の友だちに、「昨日、瑠美ちゃんが教会に行ってくれてね、ご神前にこれがあったんだって。これ、みんなで飲もう」と、その話をうれしそうにされて、みんなでそのワインを飲んだんです。

（ナレーション）

うれしそうに話すお母さんの姿を見て、高井さんは、前に比べたらほんの少しでも寄り添えたんじゃないかと思えたそうです。

その後、グリーフケア活動の拠点を設けることになりました。いろいろな候補地が挙がりましたが、その中から選ばれたのは偶然にもアコさんの地元、神奈川県の藤沢でした。その偶然に高井さんは、アコさんが応援してくれていると感じました。

藤沢では、今も毎月グループカウンセリングが開かれ、大切な人を亡くされた方々が、つらい胸の内を語られます。高井さんは、最初は寄

り添えるか不安だったそうです。

（高井）

実際にボランティアをしてみると、「人が人を思う、その思いの深さ」にものすごく触れることができました。涙ながらに、「この先、生きていける自信がない」というようなことを口にされる方もたくさんいらっしゃるんです。でも、こんなに苦しい思いをたくさんの方がこの経験をされてこられたんだというのを考えてみると、「私も、この経験を、いつか誰かの役に立てたい」っておっしゃる人がすごく多いんです。

（ナレーション）

高井さんは、自身の「がん」を、神様からかけられた願いの「願」と受け止めていくように先生に諭されました。そして、親友の病を経験し、グリーフケアを学ぶ中で、「同じように苦しんでいる人のお役に立ちたい」という思いが湧いてきました。その思いの中に、「人を助けたい」という神様の願いを見つけたのです。

高井さんは、これからもグリーフケアをとおして、人が助かるお役に立ちたいと願っています。

《信者さんのおはなし》

「神様になった子どもたち」

（ナレーション）

北九州市にお住まいの愛智俊行さん美樹さんご夫妻は、結婚2年目に授かった長男・暖君を幼くして亡くしました。暖君は、先天性の染色体異常でいくつもの重い病気を抱えて生まれました。そして、2年2カ月を精いっぱい生き抜き、亡くなりました。ご夫妻が金光教と出合ったのは、この時でした。

悲しみに打ちひしがれている俊行さんに、お父さんから、「葬儀は、金光教でするからね」と告げられたのです。その時初めて、俊行さんのおじいさんが、金光教若松教会にお参りしていたことを知らされました。愛智さんご夫妻は、戸惑いながらも、初めて教会へ参拝。そこでの出会いが悲しみと絶望の淵に沈む二人を支えてくれることになります。

（愛智）

「暖がまだお腹にいる時から、少しずつ障害が分かってくる状態だったから、あの時は一つ一つむしられてるような気持ちでした。もちろん、その時には教会との出合いもなかったですし、誰にも話せないというか、話したところで何も解決しないし、何も生まれなかったですね。

暖が亡くなって、葬式をどうするかという時に、初めて父から金光教のことを聞かされて、教会とは何かも分からないまま紹介してもらっ

たのが、初めての出合いです。その時にお会いした若松教会の亮先生が、かなり衝撃的でした。僕の周りにいないような方で、同い年だったので、そこから急に距離が縮まったというか、それからの教会とのお付き合いになります。

僕や美樹の抱えたものを楽にしてくれた存在というか、暖が亡くなった後の僕たちの心のケアをしてくれました。無理やり引っ張って導くわけでもなく、後ろから押すわけでもなく、ただただ寄り添ってくれている存在がありがたかったです。

意味も分からず足を運んで、暖が亡くなって、何をしてもテンションが上がらない状態だったその気持ちを紛らわすために、教会に足を運んだ。よく分からないけど、手を合わせてということを繰り返しながらの日々でした。金光教のことを教わるよりも、先に僕たちの心を埋めてもらった感じです」

（ナレーション）

教会にお参りし、心の苦しみを受け止めてもらいながら、少しずつ2人の心は整えられていきました。そして、3年の月日が経ち、「もう一度わが子に会いたい」という願いを持てるようになった時に、第2子を妊娠しました。様々な不安を抱えながらも、無事に女の子を出産。紬（つむぎ）と名付けられました。紬ちゃんも、暖君と同じ障害を抱えていました。大手術を乗り越え、暖君の時には叶わなかった自宅での育児をすることができ、幸せな時間を過ごすことができま

した。

しかし、紬ちゃんが2歳2カ月の時に、心肺停止となりました。意識が戻らないままの入院生活となりましたが、以前とは違う心持ちで受け止めることができました。目を覚まさないけれど、生きていてくれる、それが、どれほどありがたいことか。その日その日の命を頂く幸せに気付かせてもらったと美樹さんは語ります。

紬ちゃんは、4歳7カ月で、お兄ちゃんの元へ旅立ちました。お葬儀では、「紬は、よくがんばりました。この場にふさわしくないかもしれませんが、拍手で送ってやってください」とあいさつしました。

お子さんを亡くした時は、まるで自分の体の半身を削られているような感覚に陥り、喪失感に苦しんだと言います。その悲しみや苦しみをありのまま教会で受け止めてもらえたことで、いつの間にか「今日も1日無事に過ごせた。子どもたちのおかげ。神様のおかげ。みんなのおかげ。ありがたい」。こんなふうに思えるようになりました。

愛智さんご夫妻は、昨年飲食店をオープンしました。それは、何十年か先、いつか自分たちが亡くなった子どもたちに会った時、「あなたたちに守られていたから、こんなに楽しくて、こんなにいい人生が送れたよ」と話してあげられるようにしたい。そんな思いからでした。

（愛智）

「子どものことや、教会の教えを踏まえて、

ちょっと心が強くなったというか、お客さんに来てもらって、感謝を感じる回数が増えました。感謝というのは、ずっと教会の先生が言ってくれてた言葉で、本当に今、心から感謝すると思えることが多い日々を送らせてもらってます」。

（ナレーション）

愛智さんご夫妻のように、人生には、どうすることもできない、あらがえない問題というものがあります。ご夫妻は、それを教会で受け止めてもらい、どうにか自らにも受け止めることができるようになりました。そして、自分たちが幸せになる道を選択し、歩みを進めることができました。

今、2人のお店に訪れるお客さんからは、「おいしかった。幸せな時間をありがとう」と言ってもらえる優しい空間を提供することができています。お客さんの背中を見送りながら、ご夫妻は今の幸せをかみしめています。

悲しみが悲しみのままで終わらない助かりの道があることを、愛智さんご夫妻が教えてくれています。

金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　０８６５-４２-６４５３

FAX　０８６５-４２-２１１４

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送　日曜日　あさ5時40分

放送センターHP
「こころで聴く
おはなし」

「こころで
聴くおはなし
Podcast」

放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。